

# アルパック ニュースレター



筒井町天王祭 神皇車山車 (本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1995年7月1日

- 尾張名古屋の祭 その伝統と創造 ..... 2
- 祇園祭の舞台装置 ..... 4
- 交流ともてなしの宿「但東の家」 ..... 6
- 灯は永遠に 河野卓男氏を悼む ..... 8
- ラウンド・アバウトからの瞑想 ..... 9
- NPOとシンクタンクについて考える ..... 10
- 自然の音とのハーモニー ..... 12
- 新刊旧刊書評紹介 ..... 13
- まちかど ..... 14

NO.72

# 尾張名古屋の祭 その伝統と創造

尾関 利勝 / 伊藤 陽子

## 祭は地域イメージの代名詞

祭の名から地域が連想されるように、祭はハレの場を持つ地域の代名詞になっている。

社寺や皇室行事を除き、祇園祭のように室町時代に始まる祭や、七五三のように明治以後の新伝統行事もまれに見られるが、町衆が参加する祭の多くは、日本の都市の大多数が江戸の町を基礎とするように、近世文化をその底流として伝承し発展させている。

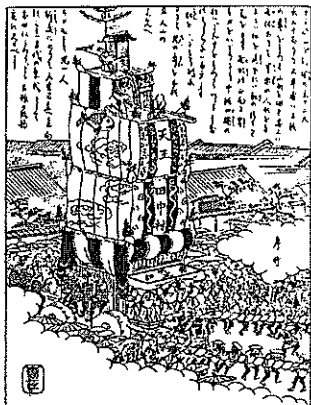
昭和40年代半ば頃までは、大阪天神祭、京都祇園祭、東京三社祭などに衰退傾向が見られたが、この頃を境に都市の伝統的祭は再び活気を呈するようになってきた。

近代以後、各都市で商工祭を基礎とする新たな祭を始めているが、伝統の祭が持つハレの場の興奮は未だ創り出し得ていない。

## 名古屋地域の祭とからくり山車

名古屋地域の象徴的な祭は、大別して三つの流れがある。千三百年以上の歴史を持つ熱田神宮を始め社寺にまつわる祭、濃尾平野から山間部に伝わる農山村地域の祭、そして都市の近世文化を受け継ぐ町衆の祭である。

この内、町衆文化を伝える代表的祭は、環伊勢湾から飛騨に広がる「山車からくり」だ。



「尾張名所図會」愛知県郷土資料刊行会

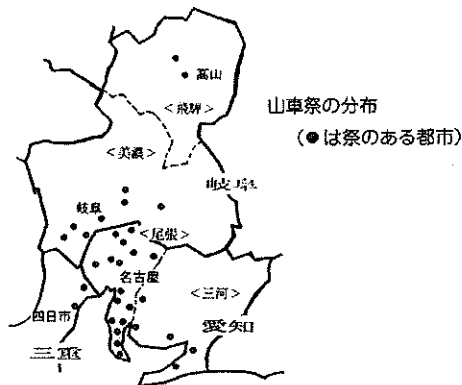
名古屋は戦災都市で有名だが、その時系列的断絶は、城下町文化の象徴である城とともに町衆祭を崩壊させ、地域アイデンティティをも喪失させた。衰退しつつも復活した他都市の祭に比べ、山車からくりの本家が高山と誤解されるのもやむを得ない背景がある。

からくり山車は地元の継承活動と愛好家による啓発に支えられて来たが、脱近代の文化転換期を迎えて、モノ造り地域の文化として改めて復活の兆しとうねりが見え始めてきた。山車祭のはじまり

山車の起源は平安時代、天皇の即位に際して行われる宮中の「大嘗祭」に設けられた「標山しほやま」にあるとされている。

江戸時代、名古屋城下では、春から夏にかけて名古屋祭（東照祭・若宮祭・天王祭）が行われ、非常に賑わっていたと言われる。東照祭は徳川家康の三回忌に始められたが、その開始から十年余り後、地元町内が二台の大八車を繋ぎ合わせて能人形を飾ったのが、東照祭の山車第一号である。これがきっかけとなって町同士の山車づくり競争が始まった。

この頃、庶民の間で独自の成熟を遂げた文化の一つに、からくりの技術があった。豪商をスポンサーに、より高度なからくりを生み



出す技術者・からくり師が登場し、芝居や祭、見世物興行など大衆の娯楽文化として広く受け入れられていた。山車には、こうしたからくり人形が乗せられ、藩主や庶民などからくり演技を披露するようになったのである。山車からくりの広がり

山車からくりは名古屋を中心に尾張や美濃で作られるようになり、現在でもこの地域では多くの山車祭が行われ、現役で活躍するからくり人形は、こうした山車祭に登場するものだけになっている。

愛知県では、名古屋を中心とした犬山、小牧、岩倉、津島や知多半島の半田、東海、常滑などの尾張と、三河では知立などに山車からくりが多い。県外では、三重の四日市、岐阜は大垣をはじめ美濃や飛騨でも多く、高山では絢爛豪華な屋台が全国的に有名である。からくり人形の演技

多種多様なからくり人形の演技の中から、名古屋市内のものをいくつか紹介する。

○逆立ち（中川区・牛立天王祭）

唐子人形が蓮台を回すとゼンマイが回転し、小唐子が梅の木に飛び移って逆立ちをする。

○湯取神事（東区・筒井町天王祭）

禊ぎの一種である湯立ての神事を模したものの。巫女人形が両手に持った笹で釜の中をかき回すと、湯煙（ここでは紙吹雪）が舞う。

○文字書き（緑区・有松祭）

東海道の町並みを残す有松の通りに山車が曳き出され、唐子人形が筆で文字を書く。



筒井町天王祭 神皇車

## 新たな祭の創造

近世に端を発する祭が伝統化し、地域のハレの場となっている中で、近代以後、各地の商工祭を始め、新たな祭の創造が見られるものの、伝統を凌駕するような祭は少ない。その一方で継承性を持たないハレの場・博覧会が全国に広がっている。

博覧会は万博を踏襲した地域興しの伝統的手法で、戦後は大阪万博以来、行政施行記念も相まって、地方イベント化してきた。

名古屋のデザイン博もその一つだが、一過性の祭ではありながら、その後に継承される幾つかの成果をもたらした。様々な分野の人々による共感の交流である。

名古屋青年会議所を核に金しゃち連などの市民団体が各々の夢を交流するために始めた手作り祭「夢いちば」がその例だ。デザイン博の翌年から始め、以来6年、毎年8月に実施し、年々その輪を広げている。

もう一つの例は、デザイン博開催を盛り上げる市民運動の一つとして始めた尾張名古屋の文化伝承と再生をめざす名古屋城本丸御殿再建の運動だ。今年、金しゃち連10年の歴史から新たに地域文化を掘り起こす本丸御殿フォーラムに生まれ変わった。

そのキャンペーン行事の中で、初代藩主徳川義直に嫁ぐ紀州浅野藩から輿入れした春姫の婚礼行列を「春姫道中」として現代に再現し、町を練る「女祭」を始めた。

祭の基本の一つは都市民のハレの場だ。歴史は祭が伝統化した時、ハレの場として認知されることを物語っている。祭の再生も創造も、ひとえに地域住民の気概に懸かっていると思われてならない。

（名古屋事務所 おぜき としかつ  
いとう ようこ）

※詳細は名古屋事務所までお問い合わせ下さい。

## 祇園祭の舞台装置

稿飼 奈弓

去る4月に、京都のメインストリートの一つである四条通りの防護柵リニューアル工事が完成した。以前に施工した電線地中化のキャブボックスの位置が図面と異なっていたり、神戸市長田区のメーカー本社が震災の被害を受け、また工事中に3度も自動車の飛び込み事故が起きるなど、アクシデントも続発したが、施主である四条繁栄会と、各業者、府・市など関係機関の協力のもとで工期内完成をみる事ができた。アルパックでは、施主とメーカー・施工業者による検討委員会での調整業務、公安や道路管理者等から許可を得るための資料作成等のお手伝いをさせていただき、また、三輪会長が検討委員会のなかでデザインや色彩のアドバイスをやってきた。このなかで、調整に困難を極めた事柄のうちいくつかは、近く訪れる「祇園祭」に関する問題であった。今年、宵山を歩かれる方も多いと思うが、その際にちょっと気を留めてもらえば幸いである。

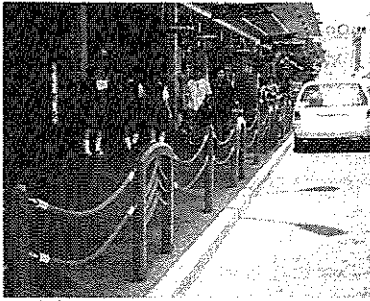
### 曳き綱をイメージしたロープ

防護柵のデザインは、メーカー数社に提案を依頼し、アルパック京都事務所内でデザイン系業務に携わるメンバー（建築チーム等）で意見交換会をし事前評価を行ったうえで、検討委員会席上で、コンペ形式で選んだものである。各社、得意とする素材が異なり、様々な案が出されたなかで、施主の心を最も強く捉えたのが「祇園祭」をモチーフにしたものであり、改めて、この四条通りで商売を営んできた人々の心情を思い知らされた。当選案に数度の手直しを加えて出来上がった最終案は、山鉦の屋根、町家の屋根の重なりと、山鉦の曳き綱をモチーフとしたものである。

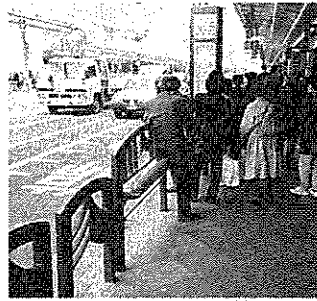
また、商店街の人々の間では「大入り」の入の字だ、いや着物の衿の合わせ目だ、等の解釈もあったようだ。

そして、この曳き綱を表すロープの是非を巡って、何ヵ月もの間白熱した論議が重ねられた。「人が座っても安全か」「子供がブランコ遊びをするのでは」「跨ぎやすそうで横断抑止効果が低い」「燃やされたり、切られたり、悪戯の対象になる」など。

そもそも、都市部の歩道に設けられる防護柵は、通常、P種防護柵という分類で、横断防止を主な目的としており、強度や設置方法の細かな規定はない。郊外や高速道路に用いるガードレールとは、求められる用途・性能が異なる。その証拠に、神戸市などでは石の玉のようなものにチェーンをつけただけのものが認められているし、京都市内でも、四条通り同様のメインストリートである烏丸通りに防護柵はない。であるから、条件はあってないようなものなのだが、既存の柵の更新ということで、強度は低下させない必要があった。また、財産権・管理主体が施主に移るとすれば、破損等の管理面での強化も重要項目である。このため、ロープは、特殊な軍手等に使用される耐熱性繊維を使って特注で制作した。勿論、芯にはワイヤーが入っている。本四架橋の工事のパイロットロープも繊維である、というのが説得材料になった。ロープそのものの強度は、数tの張力があるが、金具で接続する部分が最も弱く、そこで500kgの強度を保つようにしている。これは、人が座る時に危険がないようにという数値であり、自動車の衝撃に対しては、本体（ボラード・フェンス）の柱間隔を2m以下にすることで



一般部 NTTも電話ブースのカラーリングを合わせてくれました



レストバー付フェンス  
おじさんにはちょっと高い?



サインボード付フェンス

防ぐものである。一般的なチェーンの柵も同じ事なのだが、これを施主はじめ公安当局や道路管理者に理解していただくのが一つの山であった。交差点やバス停付近など事故の危険性の高い部分はフェンスを連続させるなどの策を講じている。

そしてこのロープは、祇園祭・四条ひろばといったイベント時には外すことができるようにしている。従来、宵山の歩行者天国の大変な人出を横目に、繁栄会の商店主達は「この人波を歩道側に引き込めれば…」と溜め息をついていたという。歩車道一体化・全面利用は施主の宿願であった。ただし、ひとつび制御を失った群衆がいかに危険であるか、という点に配慮して、巡行の人気スポットである綱切りや鉾まわし付近はあえて歩車道分離を強化している。

また、くじ改めや長刀鉾町家前など、祭の運営上、フェンスごと取り外す必要のある区間もあり、さらには裏通りやバックヤード・車庫を持たない、という京都独特の商店の形態から、通常時の前面からの搬出入のために開口を確保するなど、要求項目は他の例に較べても複雑であったと思う。

京都初(?)のこころみ

そして問題をさらに困難にしたのが、サインボード型とレストバー付きの2タイプのフェンスであった。観光客の多い通りであることや、手荷物の多い買い物客がバス停付近で人溜まりを形成していることから、これらの

人々の役に立つものを設置して商店街のイメージアップに寄与させようという思いで、我々から計画・提案したものである。補助事業の枠内、すなわち「防護柵の更新」という範疇に入るかどうか、歩道で「休憩」させて良いのか・安全か、道路案内表示は通常道路占用物として道路管理者が設置するものなのに民間が勝手に設置していいのか(屋外広告物として処理するのも歩道上では困難である)。さらに京都ならではの風致・景観関係のチェックもある。どちらも、市として許可する最初の例とのことで、これで他所でも堰を切ったように設置されては困る、といった消極的否定的見解もあったものの、施主側の根気強い説得と、行政担当者の温かい理解と機転でなんとか設置にこぎつけたものである。レストバーの方は安全面での制約から多少座面が高く、椅子というよりは荷物置場に利用されていることの方が多いようだが、サインボードの方は非常によく利用されている。

それから、この機会にゴミ箱の撤去を行った。ゴミ箱の存在が、かえって街を汚している、という理由から、バス停などに限ることとし、その一方で、若い女性による「ビューティー四条」という清掃隊を巡回させることにした。今のところ、あふれかえるゴミ箱や散乱する吸殻は確かに減っているようだ。

今年の祇園祭をご覧になる方は、ぜひ、こんな地元努力にも目を向けてください。

(京都事務所 うかい なゆみ)

## 交流とてなしの宿「但東の家」

—但東自然ふれあいセンター やまびこ別館が完成しました—

高坂 憲治

思いもかけないほど多くの旅人が峠を越えてやってきた。町民も集まってきた。

2つのゲルは、まるで大家族が集まって、はちきれんばかりに膨れ上がった家のようになり、週末にはとうとう「少しお待ちください」と、入場制限が必要なありさまとなってしまった。これは、本紙68号でご紹介した兵庫県但東町シルク温泉館のその後の話である。

訪れる人々を、手作りでもてなすように設計されたこのゲル（家）に、盆も暮れも祭も全部が一度にきたように客人がやってきたのだ。そうして一年中が、盆と暮れと祭のようになってしまったのだ。

盆と暮れと祭がそれぞれあるべき季節にやってくるのなら、そういうピークなら十分対応できるように設計した設備だけれど、全部が一度にやってきてそしてずっと続くとなると、さすがにパンクしてしまう。上がり湯を沸かす間もなく使ってしまうので、カランをひねると水が出てくるのだ。予測していた3倍以上のお客で賑わうのだから致し方ないことだともいえた。そこで、お客を大切にす山の民は、どんな時も変わらず手作りのもてなしができるように、少し設備の容量を大きくすることにした。5月の連休には間に合

うように、僕らは早速設備の改造にとりかかった。

その5月の連休には何と1日2,400人もの客人がやってきてくれたけれど、入場制限の必要もなく、上がり湯もふんだんに使うことができた。山の民は勿論のこと、一番ホッとしたのは僕だったかも知れない。

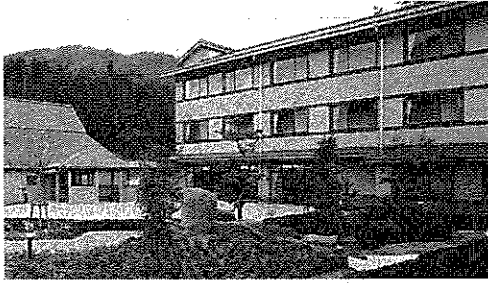
閑話休題、「あの建築は今」みたいな話はこの位にして（本当は、この後日談がとても重要だと思うのだが）、今日の本題にはいることにしよう。

僕の峠越えは続いていた。山の民の家「但東の家」を造るためだ。「シルク温泉」に隣接する「但東・自然ふれあいセンターやまびこ」は「但東シルクロード計画」の交流拠点施設として約10年前（昭和60年）に建設された。以来、但馬地域の研修や宴会、宿泊施設として多くの人々に利用されてきた。

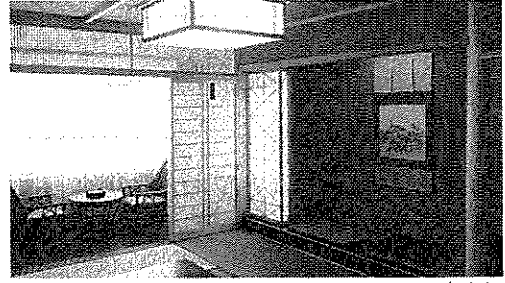
このやまびこは、元来研修施設として建設されたため、宿泊室が研修室としての大きさがあって、夏の学生達の合宿には都合が良い。しかし、定員が10人15人といった部屋では、個人や家族・小グループの利用に対して部屋の効率が悪く、すぐに満室状態になってしまっていた。



シルク温泉とやまびこ全景



やまびこ別館と中庭



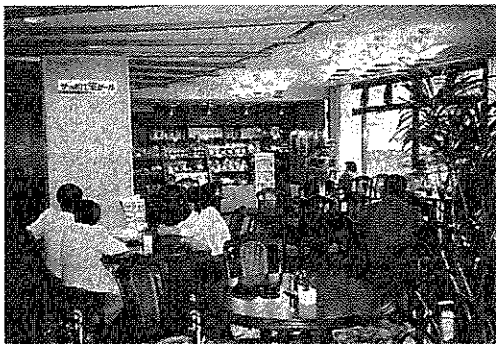
宿泊室

温泉はあるし料理はうまい。職員の人達が折って枕元にそっと置いてくれる折り鶴や、宿泊した翌朝の梅干しとお茶のサービスなどは涙が出るほどうれしいのだが、なかなか泊まれないのが難儀なことであった。

できるだけ多くの人々に泊まってもらって但東を満喫してほしい。そのためには、家族や小グループに対応した「但東の家」としての「やまびこ別館」が必要だと山の民は考えていた。

元々「シルク温泉」と「やまびこ」は一体化して交流拠点としての機能強化を図る計画としていたから、「やまびこ別館」には宿泊機能の他にいくつかの機能をもたせることを提案した。

1. やまびこ別館は、本館とシルク温泉を結ぶ動線の機能をもたせる。
2. シルク温泉で充分確保できなかった飲食機能をやまびこ別館のラウンジ機能として整備し、温泉利用者とやまびこ利用者の交流拠点として強化する。



販わうラウンジ

3. やまびこ別館にエレベーターを設置し、本館の2階と接続することにより、段状に配置されたやまびこ本館をお年寄りや体の不自由な人にとっても利用しやすい施設とする。

「やまびこ別館」は14室の宿泊室をもち、定員は80人である。13室は広縁とトイレが付属した10帖の和室とし、うち2室はバス付きとした。残りの1室はいかにも客好きの山の民らしく、車椅子で訪れた人々も利用しやすい部屋とした。介助者と共に利用してもらうのが原則ではあるけれど、ツインのベッドルームとし、車椅子で利用できるトイレやバスを設置している。

デザインは、シルク温泉が海を越えた交流を象徴させるようにモンゴルのゲルをモチーフとしたのに対し、やまびこ別館は「但東の家」としてこの地方の民家をモチーフとした。色彩はシルク温泉もそうであったように、但東の土の色を基調にしている。

草原のゲルと但東の家は、但東町民の交流ともてなしの拠点として今ひとつ所に建った。しかし、建築は町民と共に生きている。天からの贈り物である温泉を多くの人に楽しんで欲しい。山の民の願いは、体の不自由な人々も家族と楽しめる温泉づくりへと、シルク温泉家族風呂増築の計画が進行している。

僕の峠越えもまだまだ続く。

(大阪事務所 こうさか けんじ)

## 灯は永遠に 河野卓男氏を悼む

三輪 泰司

5月22日、河野卓男氏が亡くなりました。23日に八瀬の養徳寺で密葬が営まれ、6月14日、国際高等研究所とムーンバット株式会社の合同葬が行われました。

河野さんは、アルパックにとって西山卯三先生と並ぶ大恩人です。一昨年からご不調で心配していましたが、痛恨の極みです。

### 河野卓男氏へのメモワール

昨年10月12日アルパックから「河野卓男・学術都市と京都の未来」と題する著作・講演集を出版しました。岡本道雄先生に「急げ」と指示されていましたが、学研都市概成の日に間にあったのが、せめてもの慰めです。

ニュースレター64号(1994年3月)に「近代京都・まちづくり30年のメモワール」と題しビル竣工を記念して、京都ファッション産業団地組合のことをご紹介しました。

同組合の河野理事長は体調を損ねてこの席には見えなかったのであるが、と書いています。メモワール・ビルが本当に河野さんのメモリアルになってしまいました。

### 河野卓男氏と西山卯三先生

京都ファッション産業団地の最初のマスタープランは、西山研究室によるものです。昭和37年(1962年)のことです。当時、私は東京にあって、そのことを知りませんでした。

1963年に京都へ帰り、西山先生から団地建設推進に協力するようにと紹介されたのが河野さんとの初めての出会いです。河野さんは40歳代、私は30を出たばかりでした。以来32年になります。

学研都市構想初動の時、奥田先生をお助けするよう言われたのは、河野さんと西山先生

でした。ご二人の関係については深く聞いていません。専門も立場も、ましてや思想的にも全く異なるお二人ですが、何か共通するものを感じます。そのことは河野さんの著作集の“解説”に触れています。

今や冷戦は終わった、イデオロギー対立の時代ではなくなったといわれています。対立していたイデオロギーは、何れも西欧文明の中から生まれたものではないでしょうか。それとは異なる世界観・価値体系があります。歴史も文明もあります。少なくとも、我々は自分の足で歩き、自分の頭で考え、道を求めるべきである。この点に、お二人の一致点があるように感ずるのです。

### 河野卓男氏の人間像を

河野さんがアルパックの大恩人である所以は、情況判断でのご指導です。関西の、京都のそしてアルパックと私自身にとってリーダーであり、灯台です。リーダーの決断は歴史をも画します。しかし、それは決して華やかなものではなく、悩みも迷いもあるのです。

河野さんは一見、傍若無人で、実は濃やかな心遣いの人でした。なりふり構わぬようでオシャレなことも、西山先生と似ていました。

経済同友会でご指導を受け、京都東ロータリークラブでは、奥田東先生ともご一緒に過ごし、濃密で充実の32年でした。

そのような河野さんの人間像を、公式の事蹟とともに語り継ぐのは私の責任だと思えます。河野さんは、永久に私達の灯です。

(代表取締役会長 みわ ひろし)



## ラウンド・アバウトからの瞑想

内村 雄二

ラウンド・アバウトをご存知の方は多いと思うが、実際にドライブで通過したことのある人は、あまり身近にはいない。英語の「round about」は、「四方八方に」、「ぐるりに」といった意味のことで、この言葉どおりの交差点をラウンド・アバウトという。英国では、ロンドンの都心でも、郊外のニュータウン、田舎の集落や田園の道にもラウンド・アバウトがあり、興味をそそる。

十字や格子状ではなく何故円形の交差なのか、誰でも気になることだがよく分からない。「あれは、馬車がまわりやすいようにそうなっているんです。」と運転中にガイドさんが教えてくれて、なるほどと思った。(そんなことも知らないのかと叱られるかもしれないが…)

ロンドンの観光マップをみると、多様なラウンド・アバウト(クロス、サーカス等と表示されている)が随所にある。バッキンガム宮殿一帯の都心に効率よく直線的に四方八方に伸びる道、その要、焦点となるところがラウンド・アバウトとなっている。馬車のまわりやすさということ以外に、十字や格子状に比べた最大のメリットは、交差からの道(ルート)が4以上とれるとともに、目的地方向

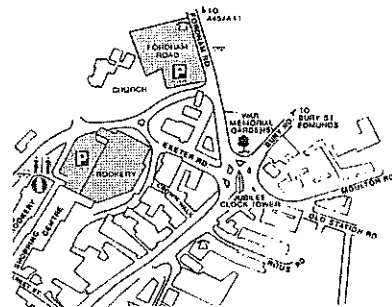
に直進することができることである。かつて馬車という高速アクティビティを、都市の中に組み込んだ際の英知、工夫がラウンド・アバウトのようである。この出現により、道とラウンド・アバウトの織りなすひとつのネットが有機的に広がり(ただし格子状ではなく)、結果的に今のような西洋的な幾何学状の街路体系のまちができたのではないかと推察される。

欧州の大都市の中心市街地は、大きな格子(グリッド)で構成されているところもあるが、それを囲むような周回道路(ループ)がみられる。(ウィーン等)このループを、巨大なラウンド・アバウトと捉えれば本質的には類似している。また、まち中や宮殿前等にある各種の広場(スクエア等)もラウンド・アバウトの役割をもっているようだ。

京都、奈良に代表される格子状のまちは、何故格子状なのか。アクティビティ(当時の都市交通)という観点のみで考えると、これらの場合、馬車ではなく牛車や人駕籠が主流であったからではないだろうか。つまり、馬車に比べアクティビティが緩慢でかつ小型なので、十字や格子状でも効率性、安全性に大きな支障はなかったのだろう。そういえば、平安の絵図にも牛車は登場している。先の西洋的なまちと格子状のまちとの相違は、大げさに言えば、馬文化と牛文化の違いかもしれない。



ラウンド・アバウトの産みの親であろう馬車  
(ウィーンにて)



競馬で有名なニューマーケット  
:この小さなまちにあるラウンド・アバウト  
:道とラウンド・アバウトの織りなすひとつ  
のネットを示す好例

馬車と自動車と比べると、速度あるいは大きさといった点ではそんなに市街地内では差はないので、英国などにラウンド・アバウトが現在も継承されていて不合理はない。こういった背景もあって、昔からあった道路や沿道建物をあまり変える必要がなく、結果的にモータリゼーションが、まちの街区形状や景観などに与えた影響は少なくすんだように思われる。一方現在においても、郊外ニュータウンで有名なミルトンキーンズなどでは、交通計画・アーバンデザインの中に巧みにラウンド・アバウトが援用されているのである。馬文化から車文化への移行が、スムーズかつサステイナブルであることを物語っている。故に、道の景色が美しい。

これに比べ、牛文化から車文化への移行は問題が多い。つまり、両者のアクティビティの差異が大きすぎるので、その受け皿であるまちが車文化になじまないものである。

空間的にもそうだが、何よりも車文化を受け入れた我々の意識が、曖昧でアナーキーになってしまった。故に、この国では道の意味は、利便性以外をいうのに戸惑う。

我国をはじめ東南アジアのモンスーン地帯は牛文化圏かと思うが、同様の悩みをもちつつあると思う。他に、インドやタイでは象に乗る、エジプト・中近東ではラクダに乗る、ツンドラでは犬橇に乗る、またベニスでは舟に乗る。人と乗物との関係は、その国の文化を語り、人を含んだ環境とのサステイナブルさを計る指標とも考えられる。もし、象文化やラクダ文化が、世界の主流となっていたらと思うと、スピルバーグの映画のように夢膨らむ。先の国々は、幸か不幸か経済先進国に比べ、やや緩やかにモータリゼーションが進んでいるので、考えようによっては、車文化への移行について十分検討する余裕があるよ

うに思われる。つまり、それぞれの文化背景に応じた、独自のラウンド・アバウトを創り出すチャンスがあると思う。ただ、個人的には、そういった移行はなくてもすめばよいのにと願わずにはいられない。

(大阪事務所 うちむら ゆうじ)

## NPOとシンクタンクについて考える

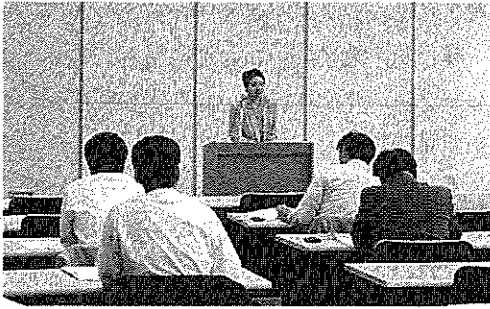
杉原 五郎

はじめに

さる5月23日(火)、大阪のOBPで、アルパック国際セミナーを開催しました。テーマは、「市民社会とシンクタンクー日米のシンクタンク事情について語る」、講師は、ワシントンにあるアーバン・インスティテュート研究員の上野真城子さんをお願いしました。コメンテーターには、吉川和広先生(関西大学教授)に引き受けていただきました。平日の午後にもかかわらず、シンクタンク、行政、大学などの関係者40数名の参加を得ることができました。「たいへんタイムリーな企画であった」「アメリカのシンクタンクの実情が良くわかった」等といった感想を参加者より多数いただきました。

### アメリカのNPOとシンクタンク事情

上野さんは、日本の大学で居住地整備計画や住宅政策の研究を行い、しばらく日本のシンクタンクに勤務した後、渡米されました。1986年から10年ほどアーバン・インスティテュートに勤務されており、最近では、シンクタンクのあり方などで活発な論断活動を展開されています。今回のセミナーでは、アメリカ社会におけるNPOとシンクタンク事情について興味深い話題を提供していただきました。



アメリカには、ノンプロフィットセクター（NPO）があり、これは、第1セクターとしての公的部門（国及び地方政府）、第2セクターとしての私企業部門とは別のもので、民間の非営利組織であり、アメリカでは第3セクター（日本の三セクとは異質のもの）と位置づけられています。公園の維持管理なども、市民のボランティア活動によってなされていますが、実はこれもNPOによる運営であるといえます。公務員でもなく、会社員でもない人達が、生き生きと活動しており、GNPの10%近いマネーがNPOを経由しているとのことです。

ワシントンにあるアーバン・インスティテュートやブルッキングスなどのNPO型シンクタンクは、概ね次のような状況にあります。

- ①アメリカには、政府は過ちを犯しうるものだ、だから、国民は政府を常に監視していないといけないという伝統的風潮がある。（自立した国民の存在、民主主義の重要性）
- ②アメリカの連邦政府は、4年ごとの大統領選挙によって政権が交替すると、それに伴って3,000人ほどの行政職員のトップが入れ替わり、行政の力量がなかなか蓄積されない構造になっている。（政府の政策をバックアップする機能の必要性）
- ③アメリカでは、シンクタンクの市場が成立している。需要者として政治家や行政・メディアが存在し、政策研究と政策提言とい

った生産物が出版やレポートを通じてシンクタンクから供給されている。

- ④アメリカのシンクタンクは、経済活動として存在しており、実際に相当量の資金が流れている。連邦政府や州政府などからの委託もあるが、企業献金や財団資金も潤沢にある。
- ⑤上記の背景のもとに、政府などクライアントから独立した、NPO型シンクタンクがさまざまな政策研究と政策提言の活動を活発に展開している。

上野さんは、日本においても、アメリカ社会に定着しているNPOのシンクタンクをぜひ創っていかねばならない、という点を強調されて講演を締めくくられました。

また、コメンテーターをお願いした吉川先生からは、ご自身の幅広い経験を踏まえて、「21世紀を目前にしてわが国は転換期にあり、20世紀的発想と価値観では対応できなくなっている」「機械論的パラダイムから有機論的パラダイムへの転換（自己組織化原理）が求められている」といった時代認識を披瀝された後、政府（行政）と市民及び民間の果たすべき役割について一つの方向性を示されました。さらに、インハウスコンサルタントとして、行政を納得させ行政をリードするようにさらに頑張る欲しいという激励の言葉をいただきました。

—シンクタンク論及びNPO論のさらなる展開を—

アルパックでは、1967年の創業以来、地域計画やまちづくりのさまざまな仕事をしながら、コンサルタントはいかにあるべきか（「コンサルタント論」）について熱っぽい議論をしてきました。昨年4月に亡くなられた西山卯三先生をはじめ多くの先生方や行政等の関係者からも幾つかのアドバイスをいただいてき

ました。アルパックも来年には創業30年という節目の年を迎えます。こうした時期、シンクタンク及びコンサルタントのあり方についても、いま一度おおいに議論してしっかりとした方向性を見いだしていきたいと思えます。

また、わが国には定着していない新たな社会システムとしてのNPOについても、私自身は強い関心を持っています。ひとつは、阪神・淡路大震災からの本格的な復興まちづくりの中で、「市民の自発的なまちづくりを支援する機構」をなんとか具体化できないものかと考えています。いまひとつは、関西文化学術研究都市のセカンドステージプランの中で、「学術研究及び産業創出のための研究企画・資金調達システム」を検討しています。いずれにおいても、一定の公共性を担保しながら、状況の変化に対して柔軟に資金運用できるシステムと組織が求められており、日本型NPOのあり方が焦点となっています。

今回のセミナーを契機として、シンクタンクやNPOのあり方についてさらに活発な議論が展開されることを期待したいと思います。

(大阪事務所 すぎはら ごろう)

自然の音とのハーモニー  
～ザイラーかやぶき音楽堂～  
中村 孝子/芳賀 教子

そろそろ田植えが終わろうとしている田畑を縫うように続く道を行くと、北山杉のある里山をバックにかやぶき音楽堂がゆっくりと姿を現した。

日吉町(京都府)で福井県の古寺を移築して造られた『ザイラーかやぶき音楽堂』のコンサートに行ってみた。

演奏者は、国際的なピアノ・デュオとしてまた農業に汗を流す「タンボニスト」として

有名なエルンスト・ザイラー氏である。

春と秋に数日間にわたり開催されるクラシックコンサートには、はるばる東京や九州から足をはこぶ人がいるそうだ。定員は 250名で、2、3階にある桟敷席もいっぱい、敷き詰められた色とりどりの座布団が新鮮に映った。

音楽堂は大きな吹き抜けのある木造平屋建て、天井を見上げると煤ぼけた木と縄の組み合わせが美しい。普段接することが少なくなり、忘れかけていたどっしりした木の厚みとぬくもりが感じられる。同様に音の響きも暖かく包み込むように広がっていく。

演奏中には、開け放された窓から畑を渡る心地よいそよ風が流れ、時折小鳥のさえずりや蛙の鳴き声を運んでくる。自然が奏でる音楽とピアノの演奏とが絶妙にマッチし、贅沢で快適な空間になっていく。

休憩時には、ザイラー氏の奥さんとお子さんが作ったケーキとおむすび、地元のお酒が振る舞われ、心のこもったもてなしにすっかりくつろいだ気分になった。

このようなかやぶき民家や農家の風景が、日本人の心からどんどん失われていっている。過疎化が進む中で建物の保存は困難だけれど、その大切さを改めて実感し、今度は隣にある「茅ぶき民家の里」で有名な美山町を訪れてみよう、音楽堂をあとにした。

(大阪事務所 なかむら たかこ)

(京都事務所 はが きょうこ)



桟敷席もびっしりの音楽堂

## 新刊旧刊書評紹介

渡辺 一枝 著

集英社文庫

## 『時計のない保育園』

紹介 原田 和子

無許可の保育園づくりから始まり、よりよい保育の実現を求めて6つの園を移った著者の10数年の軌跡である。著者いわく、「迷っているお母さんたちのなにかしかの役に立てればよいと思って書いたが、いわゆる育児書ではなく、『子育て心構え篇』といったところだ」そうだ。

読んでまず、常識と思ったことがくつがえされてしまった。例えば、「保育園には滑り台もブランコも時計も要らない。」えっ、保育園や児童公園には滑り台もブランコもあるものだし、子供も喜んで遊んでるんじゃないの？時計だって各部屋に付いているものだし…。著者は言う。「滑り台やブランコなどは、子供が自分の力を知ろうとすることに枷をはめてしまう。子供にとっては、遊びを型にはめてしまうものに身をまかせるよりも、自分から世界の探検や冒険に向かっていくような遊びが必要」なのだ。（ブランコは昭和62年の通達で外されるまで児童公園への設置を義務付けられていた。）そして、「幼い人にどうして時計が必要でしょう。日々同じように時が流れること、このことに大人が心がければ幼い人はその体内に時計を持てるのです。時計のない保育園に時を刻むのは幼い人達なのです」。どうしても子供の時間は親の都合で左右されがちだが、規則正しい生活を提供し、時間だからと追い立てられることのない、のびのびとした生活を与えることが大人の義務であると。

この本のどこを切り取っても、子供を一人の人格として尊重することの大切さと、人間としての土台をつくる時期に関わる大人の責

任の重さを考えずにはいられない。子育てのような、生きた人間を相手にするということはなるようにしかならない、などと思いつつ、心のどこかで漠然と理想の姿を描いている

私は、「目の前にいる子供の姿をよくみつめること。その子自身の現実からしかその子の保育は出発できない」「子供たちをどう育てるかではなく、私たちがどう生きるかが幼い人を育てることなのです」などの、経験と自信に裏うちされた言葉によって、改めて考えさせられ、姿勢を正された思いである。

もっと早い時期にこの本に出会っていれば、実習で保育園や児童福祉施設などを色々回って感じた（とても多くの、しかし漠然とした）憤りも、もっと自分の中で整理できて何らかの進み方ができたかもしれない、と残念に思う。

こんな言葉も印象に残っている。「一緒に暮らす人同士がお互いにかけてあげのない一人だと思えることは、どんなに幼い人をも一人の人格として尊重し、お互いに名前と呼ぶこと、正しい一人称で呼びあうことなど中にあるかもしれない。」あなたは最近、大切な人を名前と呼んでいますか？

（京都事務所 はらだ かずこ）



## まちかど

### 復興のまちのお祭り

中嶋 久枝

5月21日、「神戸五月まつり」に行ってきました。その日はあいにくの雨でどんなものかと思いましたが、やはり、お祭りだけあって、予想以上に多くの人が見に来ていました。

元町商店街を中心に、南京町広場ステージ、神戸元気食堂、ヤマハ前ステージ、ミュウ広場と数カ所でイベントをやっていました。元町商店街はアーケードも無事で、震災の影響をあまり感じませんでした。神戸元気食堂は震災後にできた仮設店舗でこの五月まつりの期間のみでなくずっと営業していて、予定表にはミニコンサートの出演予定がびっしり書かれていました。またミュウ広場は、被災して営業できない料理店によるインド、ペルー、スペイン、中国各国の料理などが楽しめるほか、国際バザールが開かれていました。

お祭りのメインのパレードは、スタートから延々と流れていくのかと思っていたのです



あたりの空気が一変する華やかなサンバ

が、そうではなくて、一つの団体が通るとしばらくは次が来なくてそれぞれが独立していました。アーケードが架かっているので近すぎると音が混ざってしまうようです。普段の元町商店街は、センター街とかと比べると、ひっそりと落ち着いた感じですが、この日は雨にもかかわらず、多くの人で賑わっていました。そして、パレードの中でも特に多くの人が見守ったのはサンバで、すーっと通り過ぎるのではなく、ところどころで止まって踊りを披露していて、あっと言う間に何重もの人の輪に囲まれていました。おじさんの割合が多かったのは気のせいでしょうか。

それはともかく、今回の「神戸五月まつり」は毎年やっていた「神戸まつり」が阪神大震災のため中止となったのを、元町、南京町両商店街が中心になって市民の手で実現させたものでした。震災にも負けない「神戸っ子」の強さを見せてもらったように思います。そして来年以降には、街が復興してこれまで以上にパワーアップした「神戸まつり」が見れることを期待したいです。

(大阪事務所 なかじま ひさえ)



ミニコンサートも楽しめる「神戸元気食堂」

## アルパック (株)地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル2F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673
- (株)アルパックインターナショナル 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)965-2012 FAX(06)965-2014
- (株)都市居住文化研究所 〒604京都市中京区東洞院通り六角上ル三文字町225・朝陽ビル4F/TEL(075)252-2231 FAX(075)252-4417